

日本比較文化学会中部支部

第 15 回支部大会

発表抄録

日時 2025（令和 7）年 9 月 28 日（日）

会場 梶山女学園大学

* オンライン（Zoom）同時開催

日本比較文化学会中部支部 第15回支部大会 プログラム

日時：2025（令和7）年9月28日（日）10:00～17:00（予定）

会場：椙山女学園大学 星が丘キャンパス（愛知県名古屋市千種区星が丘 17-3）

会場世話人：樋口謙一郎（日本比較文化学会中部支部長）

＊オンライン発表者の方には9月27日（土）までにZoomリンクをお送りします。オンラインでの聴講をご希望の方は同日16時までに、世話人までメール（higuchi@sugiyama-u.ac.jp）でお申込みください。

（当日のお申込みの場合、即時に対応できない場合がありますのでご了承ください。）

プログラム

10:00 開場

10:30-10:40 開会の挨拶（中部支部長 樋口謙一郎）

10:40-11:40 特別講演（司会 樋口謙一郎）

朴成柱（愛知医科大学）「繰り返される家族の記憶—深沢夏衣の作品を中心に」

11:40- 総会（終了後、昼食休憩）

13:00-17:00 自由研究発表

（前半司会 二村洋輔）

- ・Khomenko Nataliia（筑波大学大学院）「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における少女の表象 —1980年代の「可愛い」少女像をめぐって—」
- ・水町いおり（中京大学）「『ボヴァリー夫人』再読 —あるいはシャルルの物語—」
- ・長谷川千春（至学館大学）「野球映画における異文化交錯：戦士とスポーツ選手の現代メディア表象」
- ・松家鮎美（岐阜薬科大学）「第二言語不安に起因する大学生の英語コミュニケーション課題と教育的介入」

（休憩15分予定）

（後半司会 長谷川千春）

- ・二村洋輔（名城大学）「記憶・忘却・イデオロギー：シンガポールとマレーシアの国立博物館の比較から」
- ・田島喜代美（常葉大学）・津村公博（浜松学院大学）「大学生による伝統芸能『勝坂神楽』の継承 —SWOT分析に基づく考察」
- ・樋口謙一郎（椙山女学園大学）「歴史の『忘却』を考える：バタムと日本軍」

（終了後、閉会）

繰り返される家族の記憶—深沢夏衣の作品を中心に

朴成柱（愛知医科大学）

本稿では、在日朝鮮人女性作家・深沢夏衣（1943–2014）の作品において、「家族」という主題がどのように繰り返し描かれ、表現されているのかを考察する。とりわけ、「家族」という単位が彼女のアイデンティティの揺らぎや、ジェンダー的・民族的抑圧といかに結びついて表象されているのかを、女性作家という視点から再検討する。主な分析対象は、彼女の初の単著『沖縄で考えたこと』（いかだ社、1970 年）とする。なお、本発表での引用は、『深沢夏衣作品集』（新幹社、2015 年）から引用し、各作品の初出年も併記する。

深沢夏衣は、1969 年に勤めていた出版社を退職した直後、単身で沖縄へ渡り、3 週間にわたり現地を訪問・調査した。その体験をもとに執筆されたのが『沖縄で考えたこと』である。米軍統治下にある沖縄の現実に触れた彼女は、抑圧された地域の姿に、自身の出自である在日朝鮮人としての歴史的経験と重なるものを見出す。そして、この経験は、彼女にとって自らの出自や家族の歴史を振り返る契機となった。本書では、日本社会に根強く存在する民族差別の構造を再認識するなかで、根なし草のように生きざるを得なかった両親の姿が語られ、彼女はその体験を「私の内部にある朝鮮人性」（671 頁）として言語化しようとする。

こうした自己認識の深化は、やがて彼女の創作や発言に連なっていく。1973 年から 1975 年にかけて刊行された在日朝鮮人向け雑誌『季刊 まだん』（全 6 号）において、彼女は手記「わたしは結婚しない」¹（3 号、1974 年）を発表する。この手記では、結婚制度に対する違和感とともに、両親の結婚生活が回想されている。「お互い顔も知らぬままに結ばれた」（431 頁）両親の結婚は、当時の在日社会における慣習や抑圧を反映するものであり、現実への鬱屈を家庭内暴力としてしか表現できなかった父と、それを黙って受け止め続けた母の姿が描かれる。深沢は、そうした両親の姿に対し哀しみと共感を示しつつ、それ以外の生き方が許されなかった彼らの現実に深い絶望を抱く。手記の終盤では、「子どもを産み育て、私の苦しみをその子が引きついで生きること」（432 頁）への恐れが語られ、「私には家庭など必要ない」（432 頁）とする否定的な決意が述べられる。ここにおいて家族は、単なる回想の対象ではなく、女性として生きることの痛みや矛盾、そして在日朝鮮人であることの困難と交差する主題として捉え直されている。

このような問題意識は、以後の作品群にも繰り返し現れる。1970 年代後半から 1980 年代にかけて、深沢は在日二世が編集委員を務めた雑誌『季刊ちゃんそり』の編集委員を務め、複数のエッセイや手記を寄稿した。なかでも注目されるのが、「人の助けはかりたくない」

¹ エッセイ「わたしは結婚しない」は、『深沢夏衣作品集』（新幹社、2015 年）に収録される際に、タイトルが「結婚を阻むもの」へと改められた。

（『季刊ちゃんそり』4号、1980年）である。本作は車英子名義で発表されたが、内容は彼女の従姉妹をモデルとしたもので、後に「パルチャ打鈴」（『群像』1998年）、「ぱらんせ」（『地に舟をこげ』3号、2008年）に登場する李福子という人物の原型となる。これらの作品では、帰国事業（1959-84）によって家族と引き裂かれ、日本に独り残された女性の困難な生活が描かれる。

さらに、デビュー作『夜の子供』（講談社、1992年）や「ぱらんせ」では母親との関係が、「パルチャ打鈴」では亡き父や兄との関係が描かれ、深沢が家族という存在を通じてアイデンティティを描こうとした姿勢が一貫して見られる。これらの物語においても、『沖縄で考えたこと』で見られた葛藤は形を変えながら繰り返し語られている。

姉との関係を描いた短編としては、「姉の恋」（『新日本文学』1997年）や、後年のエッセイ「文学と出会う」（『社会文学』第26号、2007年）が挙げられる。とくに後者では、作家として生きることへの意識が語られており、家族との関係性のなかから自己を見つめる視点が継続していることが確認できる。

このように、深沢の作品における「家族」の主題は、在日朝鮮人としての歴史的背景と、女性としての生の条件を重ね合わせて語られる。その繰り返しによって、彼女は「家族制度」への問いと同時に、ジェンダーや民族といった複合的な抑圧の構造に向き合い続けたといえるだろう。とりわけ『地に舟をこげ』に収録された作品群においては、「女性文学として小説を書いた」と捉えられる側面も強く、本発表ではこのような深沢作品における「家族」の表象を、女性作家という観点から読み直すことで、その文学的意義を再評価したい。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における少女の表象
—1980年代の「可愛い」少女像をめぐって—

Khomenko Nataliia（筑波大学大学院）

本稿は、村上春樹の長編小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985）に登場する「太った娘」の少女表象を分析し、1980年代の日本における「可愛い」少女像との関連を明らかにすることを目的とする。

村上春樹は本作によって第21回谷崎潤一郎賞を受賞し、平野芳信（2011）は本作をその後の村上文学における長編作品の基本的なスタイルを確立した代表作として位置づけ、その重要性を強調している。また、山崎眞紀子（2004）は「ピンクとブルーの対位法」を手がかりに「太った娘」をアニメ的存在として論じたが、その表象の時代的背景との関連については十分に検討されていない。本稿は、日本文学における少女の表象を分析した高原（1999）の研究を踏まえつつ、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における少女表象の新たな解釈を提示するものである。

本稿では、「太った娘」を主人公の視点から見た「可愛い」と、彼女自身の視点における「可愛い」の意味の両面から考察する。「太った娘」が身にまとうピンク色や、彼女が歌う「自転車の唄」を分析することで、彼女が「可愛い」を単なる受動的なラベルではなく、自己エンパワーメントと他者救済を可能にする積極的な力として用いている点に着目する。

分析の結果、「太った娘」は1980年代の「カワイイ至上主義」を体現しつつ、それを超える存在として描かれていることが確認された。彼女はピンクに包まれた「可愛い」少女であると同時に、多彩な能力と責任感を持ち、主人公を救済しようとする能動的存在である。この二重性の共存は、1980年代後半以降に顕在化する少女像の変容を先取りしているといえる。村上春樹の小説における「太った娘」は、当時の文化的潮流を映し出しつつ、新たな少女像の可能性を示す先駆的存在であった。

参考文献

- 伊藤久美子「色彩好悪と色彩象徴の経年比較」、『デザイン研究』、第55巻、第4号、日本デザイン学会、2008年、31-38頁
- 高原英理『少女領域』、国書刊行会、1999年
- 平野芳信『村上春樹人と文学——日本の作家100人』、勉誠出版、2011年
- 村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989④ 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、講談社、2014年
- 山崎眞紀子「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論——ピンクとブルーの対位法」、『札幌大学総合論叢』、第18号、札幌大学、2004年10月31日、140-164頁

『ボヴァリー夫人』再読 ―あるいはシャルルの物語―

水町いおり（中京大学）

ギュスターヴ・フロベールの代表作『ボヴァリー夫人』（1857）は、19世紀フランス文学を代表する写実主義小説として、発表当初から現在に至るまで膨大な批評を呼び起こしてきた。その批評の中心は、ほぼ一貫してエンマ・ボヴァリーというヒロインに注がれている。彼女のロマンティックな幻想、不倫、浪費、そして悲劇的な自殺は、ブルジョワ社会の規範と欲望の矛盾を体現するものとして論じられてきた。

しかし、物語をもう一人の主要人物であり、エンマの夫であるシャルル・ボヴァリーの側から読み直す視点は、十分に探究されてきたとはいいがたい。確かにシャルルは平凡で受動的な田舎医者として描かれ、物語の「陰画」としての役割を担うにとどまっているように見える。しかし、もし彼を主人公として物語を再構成するならば、『ボヴァリー夫人』は単なる「ロマンティックな女性の悲劇」ではなく、「平凡な男の悲劇」として立ち現れるであろう。

この読み替えによって、エンマの夢想と並行するかたちで、シャルルにおける「ロマンティック幻想」のあり方、そしてその崩壊のプロセスを考察することが可能である。

野球映画における異文化交錯：戦士とスポーツ選手の現代メディア表象

長谷川千春（至学館大学）

本発表は、現代野球映画における国籍・人種・文化・言語・道徳の交錯を整理し、戦士像としてのスポーツ選手の表象を明らかにする。特に『ミスター・ベースボール』(*Mr. Baseball*, 1992 年)、『メジャーリーグ 2』(*Major League II*, 1994 年)、および『KANO 1931 海の向こうの甲子園』(*Kano*, 2014 年)を中心に、野球がグローバルに展開しつつ、アメリカ・日本・台湾を地理的にも文化的にも越境し、それぞれの地域で文化形成を行う様相を、映像表現や登場人物のやりとりを通して考察する。

野球に関する先行研究では、中世から近代にかけての遊戯としての起源、アメリカにおける制度化と発展、そして現代におけるグローバルな普及について議論が蓄積されてきた。しかし、現代野球が競技として変容する過程で、中世の騎士や武士の戦いに由来する要素が付与され、好戦的な雰囲気や態度が強調されることにより競技性が高まり、そこに異文化衝突の要素が含まれていく点については、十分に論じられていない。

本発表ではまず、野球の発展過程を整理した上で、『ミスター・ベースボール』におけるニューヨーク・ヤンキースのスター選手ジャック・エリオットが中日ドラゴンズに加入することによって生じる文化摩擦と融合を考察する。さらに『メジャーリーグ 2』において、日本からインディアンズに加入したタカ・タナカが言語的コミュニケーションに苦しみながらも「野球選手は武士でなければならない」と発言する精神性やチーム内での立ち位置を分析する。そして『KANO』では、アメリカから日本、さらに台湾へと野球が伝播する中での文化交錯を論じる。

これらの分析を通じて、野球が歴史的に異文化接触の衝突や摩擦の場として機能すると同時に、時にその緩和剤や融合を促す文化装置として作用してきたことを明らかにする。映画は虚構である一方で、そこに描かれる野球文化の意義や波及効果を比較文化的に検討することにより、野球映画研究が文化研究において持つ重要性を示す。

第二言語不安に起因する大学生の英語コミュニケーション課題と教育的介入

松家鮎美（岐阜薬科大学）

本研究では、大学生 40 名を対象に、英語によるコミュニケーション能力の向上を目的として、Show & Tell 形式に質疑応答を加えた発表活動を実施した。

事前に行ったアンケート調査の結果、約 9 割の学生が「人前で英語を話すことに不安を感じている」と回答した。不安の内容としては、「文法ミスが多くなりそう」「英語を話す機会が少なく、どの程度対応できるか分からない」「突発的な質問に対応できるか不安」「日本語でも人前で話すのが苦手」「質問に答えられないのではないか」「原稿なしで話すのが難しい」などが挙げられた。

授業では、発表の構成に加え、アイコンタクトや声量などの基本的なプレゼンテーションスキルについても共有した上で、発表準備に取り組んだ。本研究では、学生がグループごとに自分の「好きな物・こと」について英語で発表し、グループ内で質疑応答を行う形式を採用した。介入の際には、学生の関心や経験に基づくテーマを扱うこと、また、形式的な正確さよりも、伝える意欲や内容の工夫を重視することで、自然なコミュニケーションが促されるよう配慮した。

その結果、85%の学生が、実践を通して「人前で英語を話す自信が高まった」と回答した。発表の準備や繰り返しの練習を通して、自己表現力の強化に加え、他者の意見を聞き理解する力も育まれたと推察される。また、グループ内での質疑応答により、英語を使う機会が増え、語彙力や表現力の向上が図られたと考えられる。

一方で、即興的な対応力や質問への応答に対する不安は依然として残っており、特に語彙力の不足やリスニングの困難さに課題を感じる学生も少なくなかった。

今後は、より実践的なロールプレイや発話練習の導入、語彙力向上のための学習支援の充実が求められる。また、発表に対する心理的なハードルを下げる工夫や、緊張を和らげるための技術的指導も重要な課題である。

以上より、本活動は大学生の英語によるコミュニケーション能力の向上に有効な手法であるとともに、今後の授業改善に向けた課題を明確にしている。英語での自己表現力を育成するためには、発表形式の多様化とともに、発話に対する不安を軽減する教育環境の整備が不可欠である。

記憶・忘却・イデオロギー：シンガポールとマレーシアの国立博物館の比較から

二村洋輔（名城大学）

シンガポールとマレーシアは、東南アジアにおける経済成長を牽引する主要な国家であり、その経済的な興隆のみならず、豊かな文化的多様性に基づいて、観光地としても国際的に高い人気を誇っている。この両国は、地理的に隣接しているという地政学的要因に加え、とりわけその歴史的な変遷と植民地経験に起因する、多くの社会的・文化的類似性を共有している。イギリスの植民地としての過去は、マレー系・中華系・インド系を中心とする多民族的な人口構成や、英語を第二言語とする多言語的な言語環境など、両国を特徴づけるいくつかの重要な要素を形成する土台となっている。

このように、文化的側面において多くの共通点が見られる両国であるが、1965年にシンガポールがマレーシア連邦から分離・独立して以来、両国はそれぞれが独立した主権国家として、それぞれ異なる国家的方針と社会的発展の道を歩んできた。言語政策や教育制度に関する比較研究については、すでに多くの先行研究が存在しているが、それらの議論に関しては本発表では深入りすることなく、それらに委ねることとしたい。本発表において焦点を当てるのは、これまでほとんど比較研究の対象とされてこなかった両国の「国立博物館」という公的文化機関を通じて、両国を比較するという試みである。

国立博物館は、国家の自己認識や歴史的記憶、そしてナショナル・アイデンティティを可視化し表象する、いわばその国の存在が凝縮された象徴的な空間である。本発表では、シンガポールとマレーシアが多民族的・多文化的という共通の歴史的背景を有しながらも、国立博物館における展示やナラティブの構成を通して、何が記憶され、何が忘却されているのか、さらにはそれらを通じてどのような政治的・文化的イデオロギーが浮かび上がるのかという観点から、両国の間に見られる興味深い差異を明らかにしたいと考えている。

大学生による伝統芸能「勝坂神楽」の継承 ―SWOT 分析に基づく考察

田島喜代美（常葉大学）・津村公博（浜松学院大学）

本研究は、静岡県浜松市天竜区に伝承される伝統芸能『勝坂神楽』の持続可能な継承を推進するため、大学生を中心とした担い手育成の方策を検討するものである。市指定無形民俗文化財である勝坂神楽は約 420 年の歴史を有し、五穀豊穰・子孫繁栄・天下泰平を祈願する舞を奉納する伝統芸能として地域文化の核を成してきた。しかし、勝坂神楽保存会による奉納は、本年(令和 7 年)10 月をもって終了することが決定し、これにより地域における伝統芸能の継承は大きな転換点を迎えている。

本発表では、「勝坂神楽の持続的継承の実現―10 年後に勝坂神楽を残すには―」を課題として設定し、勝坂神楽の継承を対象に SWOT 分析を実施した。本分析は、NPO 法人わたぼうしグランドデザインに所属する大学生および大学卒業後も同法人に継続して所属するメンバーによって行われた。分析の結果、勝坂神楽の持続的継承に関する課題と可能性は、①勝坂神楽に関するイベントの実施、②メディア戦略の二つの軸から整理することができた。

イベントの実施は、技術伝承や地域住民との交流を促進する強みを有する一方で、人的・財政的負担の大きさや継続的運営の困難さが課題として浮かび上がった。これに対して、メディア戦略は低コストで広範な情報発信を可能とする利点を持つが、実体験に比して臨場感に欠ける点や、継続的な運用体制の整備およびデジタルリテラシーの確保が不可欠であることが示された。

以上の分析を通じて、イベントで得られた経験や感動を、デジタルメディアを介して共有し、外部からの支援と次世代の参加を誘発する「循環型モデル」の構築が有効であると考えられる。本研究は、地域文化継承における大学生の役割を明確化するとともに、伝統芸能保存に資する実践的かつ学際的アプローチの可能性を提示するものである。

歴史の「忘却」を考える：バタムと日本軍

樋口謙一郎（梶山女学園大学）

本発表は、旧オランダ領東インド（現インドネシア）・バタム島における第二次世界大戦期の日本軍占領（1942～1945 年）を概観したのち、その歴史研究の少なさの原因を検討する。日本軍は 1942 年 2 月、マレー半島やシンガポールを攻略し、英軍守備隊の降伏直後にシンガポール周辺の戦略拠点の掌握を進めた。バタム島やサンプ島はその第一目標となり、ほとんど抵抗を受けずに占領された。近隣島嶼でも進出がみられ、たとえばレンパン島・センブラン村（現バタム市ガラン地区）には約 1 年間日本兵が駐屯し、道路の新設や椰子の植栽など拠点整備が行われたとの証言、報告がある。

第二次大戦中、バタム一帯は、シンガポール防衛と資源確保の前哨拠点として位置づけられた。日本軍はバタム占領に際し、行政用語の変更、現地官僚機構の再編、現地語の使用奨励、日本語教育の導入などを進めた一方で、戦後に残された一次・二次資料は相対的に少ない。

本発表では、その理由を 3 点に整理する。第 1 にバタムの周縁化である。バタムは昭南（シンガポール）軍政の管轄下にあり、大規模戦闘を欠いたため、新聞・通達・統計などの一次記録が「昭南」に集約され、バタム独自の記録が生成されにくかった。

第 2 にアーカイブズの問題である。終戦直前の文書廃棄、戦後の英・蘭・米・日への分散、さらに日・英・蘭・インドネシア語という多言語性により、バタム個別の記録復元コストが慢性的に高止まりした。

第 3 に開発ナラティブによる上書きが考えられる。1970 年代以降の自由貿易区化・工業化の成功物語が行政・教育・展示の言説空間を占め、戦時経験は記念碑や口述に局在化し、公共的記憶から後景化した。

かような状況は、アーカイブズ学の立場からは記録管理の意義・重要性を強調することにつながる。他方、記憶研究の立場からは、周縁化、資料空白、開発ナラティブによる上書きといった要素は、それ自体が集合的記憶と忘却の境界上で働く変数である。今後の課題は、忘却の条件を確認し、その条件がいつどのように作用して史実の見取り図を歪めてきたのかを具体的に示していくことである。その積み重ねが、周縁化された存在の尊厳を守り、将来の記録文化を豊かにする基盤となると考える。